

聞いて、それを守る人

(ルカによる福音書11:24~28、詩編119:105~112)

今朝は、ルカによる福音書11章24節から28節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「汚れた霊が戻って来る」と言う小見出しがついた箇所と、もう一つ、「真(しん)の幸い」と言う小見出しがついた、この二つの箇所が、説教のテキストになります。いずれも、前回学んだ、「ベルゼブル論争」の箇所と密接に繋がっていて、本来ならば、これら三つは、一括して取り上げねばならない箇所なのですが、一回の礼拝と言う、限られた時間内では、内容が多過ぎて、とても一回では取り上げきれないので、止む無く、二回に分けねばなりません。従って、今日、最初に出て来た「汚れた霊が戻って来る」は、これだけを切り離して取り上げれば、奇妙奇天烈な話に思われるのですが、元々の話は、主イエスが、口を利けなくする悪霊を追い出し、口が利けなかった人が、ものを言い始めた、と言うことであって、この話を踏まえ、主イエスは、今日の箇所では、悪霊から解放された者、つまり、救われた者が、その後どう生きるか、その生き方次第では、その後の状態は、以前の状態よりも、もっと悪くなることだってあり得ることを、前もって知らせ、そうならぬようにと、注意を与えられたのです。

折角、ダイエットに励んで、成功しても、その後が肝心で、心を緩め、油断をすれば、忽ち、リバウンドをすること、誰もが、よく承知していることです。「失敗は成功の元」と言う格言があります。その反対の「成功は失敗の元」と言う格言があるのかどうか、よく存知ませんが、実は、こちらの方が、もっと真実性があるのではないのでしょうか。この類の格言は、外にもあって、「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」も、その一つですが、また、「小人閑居して、不善をなす」も、そうした格言の一つ、と見ることができるのではないのでしょうか。

主イエスは、今日の箇所で、当時、ユダヤ人の間で広く信じられていた悪霊の生態、ここでは“汚れた霊”と言われていますが、つまり、それは悪霊のことなのです。その悪霊の生態を例にとって、上に挙げたと同じような戒めを与えられたのです。もう一度読んでみましょう。「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる」。汚れた霊、悪霊は、霊ですから、体がありません。そこで体を持った人間に住み着き、内側から、あれこれ悪さをして、精神を狂わせたり、人間が持つ様々な器官、目や耳や口を利かなくさせる、と言うこともありますが、多くは、食欲、性欲、名誉欲、権勢欲と言った、人間の内側に深く根を張っている欲望を強く刺激して、これらを過剰に活発化させ、そのため、何時しか、心は荒廃し、遂には、人生そのものを破滅に到らせるのです。主イエスによって、人間から追い出された悪霊は、落ち着き場を求めて、あちこち探し回わるのですが、本来、人間の心を荒廃させ、滅びに致させることを生き甲斐とし、喜びとし、彼らの専らの働きとしている悪霊のことですから、彼らが住むに相応しい場所と言えば、荒野、砂漠、廃墟、墓場と言うことになり、先ずは、どうしてもそうした所に赴き、そこに落ち着き場所を探すことになるのですが、一度人間に取りつき、内側から人間を自由自在に操った快感が忘れられず、元いた所に戻ってみると、何と、そこは空で、空であるば

かりか、掃除がしてあり、きちんと整理までされていて、以前よりも、もっと住み心地のよさそうな、快適な場所になっているのですから、帰って来たくなるのは当然です。この快適な状態とは、何を言うのでしょうか。恐らくそれは、悪霊から解放される時、人は喜びで満たされ、天にも昇る心地になり、心は感謝、神讃美、そして、人々への愛に満ちるであろうことを、これは、それとなく暗示しているものと考えられます。そこで、悪霊は、今度こそは、二度と、この快適な家から追い出されないように、自分よりももっと悪い七つの悪霊（ルカ 8：2 参照）を仲間に引き入れて、彼らと一緒に、そこに住み着くようになる、と、主イエスは、そう言われるのです。ところで、折角、悪霊から解放されたのに、心を空っぽにして、ずっとそのまま空き家にしておくとは、何を言うのでしょうか。これは、反対から考えると、よく分かります。悪霊に代わって、心には聖霊を宿す（コリント一 3：16）、聖霊を通してキリストに心に住んで頂く（エフェソ 3：17）、神を御主人として心にお迎えする（詩編 27：1）、とすることになれば、一番望ましいのですが、そうならぬことが往々にして起こるのです。「自然は真空を嫌う。同じことは、道徳的な領域でも真実である」と、或る人が言いました。全くその通りだ、と同感します。心を、何時までも、真空状態にしておくことはできないのです。それでも尚、依然として、無防備に、誰をも迎えず、空き家にしておけば、心には、何時しか、“虚無”が、或いは、“ニヒリズム”が、住み着きます。しかし、多くの場合、そこには、神ならざる者が神として迎えられ、それが自分であれば自己絶対化が起こり、他の者であれば偶像化が起こるのは、必定です。そうなれば、その状態は、以前よりも、遥かにもっと悪い状態になる、と、主イエスは言われるのです。そうならぬよう、賢明にも、これを防いだ、実に素晴らしい二つの実例を、私たちは聖書の中に見出すことができます。今、それを取り上げ、これより、よく学び、しっかりと私たちも、身に着きたいものだと思います。

先ず、最初は、旧約聖書からです。旧約時代に於ける、最大の事件は、何と言っても、それは出エジプトだ、とすることに、誰も異論はないと思います。長年エジプトの王・ファラオの奴隷として苦しんだイスラエルの民は、モーセの指導の許、思いがけず、エジプト脱出に成功するのです。自由の身となったイスラエルの民は、恐らく、そのまま放置されれば、霧散霧消して、あっという間に、人類史上から姿を消していた、と思うのですが、そうはならなかったのは、彼らが、エジプトの王・ファラオの軛から解放された時、直ちに、主なる神・ヤハウェと契約を結び、主なる神・ヤハウェに仕える、その僕としての民、その意味で、神の民となったからでした。彼らは、過酷な暴君、エジプト王・ファラオに代わり、愛と真に富んだ主なる神・ヤハウェを、新たな御主人に迎えたのです。彼らは、この新たな御主人から授かった十戒を中心とした律法を、新たな人生を導く手引き、神の民としての生活を整える規範として、受け入れ、これを忠実に守ることを誓い、誓ったことを実際に身に着けるための実地訓練として、何と40年にも亘って、これ以上ない過酷な環境であるシナイの荒野で、試みと忍耐の日々を過ごすことになったのです。この経験により、彼らは、神の民、即ち、神の僕の自覚と、その内実を身に着け、約束の地・カナンに入る準備を整えることができたのです。換言すれば、彼らが、エジプトの王・ファラオと言う悪霊から解放され、自由の身となった時、直ちに、主なる神・ヤハウェを新たな御主人として迎えたことが、纏まったイスラエルの民として生き延び、その後の輝かしい歴史を人類史上に刻む決定的な理由となったのです。

次は、新約聖書です。教会の歴史はペンテコステ、聖霊降臨から始まりました。主イエス・キリストの十字架を前にして、一度は、イエスを見捨てて逃げ去ったイスカリオテのユダを除く11弟子が、復活のキリストにより、再召命を受け、彼らを中心とした120

人程の弟子団の上に、五旬祭の日、聖霊が降り、その日一日だけで3000人程の回心者が生まれ、一気に、多人数のエルサレム教会が誕生したのです。でも、喜んでばかりはおれません。新たに生まれた信徒の割には、指導者の数は、余りにも少な過ぎます。しかし、少な過ぎるからと言って、そのまま放置すれば、折角、救われた者たちが、新たな悪霊の餌食になることは、避けられません。この時、エルサレム教会はどうしたか、使徒言行録1章42節以下には、こう述べられています。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。・・・そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集ってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」と。彼らは、悪霊に憑き入る隙を与えぬように、熱心に使徒の教えを学び、相互の交わりを厚くし、パンを裂くこと、つまり、聖餐、愛餐を繰り返し守り、何よりも祈りに励んだ、と言うのです。成る程、これでは悪霊が憑き入る隙はありません。こうして、群れは健全で、正常な姿で成長を続けたので、人々から奇異な目で見られることなく、却って、好意をさえ寄せられたと言います。これもまた、救われた直後を狙う、狡猾な悪霊の新たな侵入を防ぐ、よき手立ては何か、私たちに、深い示唆を与えてくれる話ではないでしょうか。

次、27節以下に移りたいと思います。先ず、もう一度、この個所を読んでみましょう。「イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。『なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。』しかし、イエスは言われた。『むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である』」。主イエスが、口を利けなくする悪霊を追い出し、口が利けなかった人が、ものを言い始めたのを見て、群衆は驚嘆した、と前回の箇所14節には記されていました。ここでも、ある女が、声高らかに、主イエスを讃美するのですが、直接、主イエスを讃美するのではなく、主イエスを生んだ母マリアは、何と幸いな女性か、と、回りくどい言い方で、讃美するのです。でも、この女は、マリアが主イエスの母となることによって、どんなに苦しまねばならないか(ルカ2:35)、そのことに関しては、気付かないのか、敢えて気づかぬふりをしていのか、一切目を向けようとはしないのです。確かに、マリアは、幸いな女性でありました。でも、マリアが幸いなのは、ルカによる福音書1章25節で、エリザベトが言ったように、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた(から)」で、この世的な意味では、必ずしもそうではなかったのです。その点には、この女は、完全に目を閉ざしていたのです。そのことを彼女に窘(たしな)める意味もあって、主イエスは、「むしろ、幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人である」と、言われたのです。

実は、この個所は、ルカ特有の記事で、ルカによる福音書以外には、どこにも出てこないのです。その代わり、マルコによる福音書3章31節以下には、「ベルゼブル論争」に続いて、主イエスの家族が、群衆に取り巻かれている主イエスの許にやって来て、当然のように、主イエスを自分たちの所に呼び寄せようとするのですが、この時主イエスは、こう答えられたと言うことが記されています。それはこうです。「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と問われた後、更に続けて、周りに座っている人々を見回し、「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と、言われました。何だか、人間的には薄情な態度にも見えるのですが、主イエスにとっては、肉の関係よりも、霊の関係の方が、遥かに尊かったのです。肉の関係に於いては、主イエスの母となり得る者は、世界にただ一人、マリア以外には存在し得ないのです。これが唯一の幸いと言うなら、その幸いに与り得る者は、マリア以外にはありません。でも、

霊の関係に於いては、「神の御心を行う人」ならば、或いは、「神の言葉を聞き、それを守る人」ならば、誰だって、マリアが与った幸いに、与ることができるのです。

主イエスに対しては、そのお言葉、その御業に驚いたり、感心したり、讃美するだけでは足りないのです。聞いた言葉を大切に守り、行ってこそ、御言葉は実を結ぶに至り、主イエスがなされた葡萄の木とその枝との関係のように、主イエスとの密接な、命の通った関係が生まれるのです。

今日は、聖書朗読の折り、旧約聖書からは詩編 119 編 105 節から 112 節までの“ヌン”の部分が読まれました。詩篇 119 編は、アルファベット詩編と呼ばれる詩編で、日本語の“いろは歌”のようなもので、“ヌン”とは英語の“エヌ”に当たり、この個所では、各行は、全部“ヌン”から始まるように作られています。それは兎も角、今日読まれた“ヌン”の個所は、「あなたの御言葉は、わたしの道の光/わたしの歩みを照らす灯」と言う言葉で始まって、最後は「あなたの掟を行うことに心を傾け/わたしはとこしえに従って行きます」と言う言葉で締め括られていました。この詩編は、神の御言葉を讃えた詩篇で、神の御言葉は、律法とも、掟とも、定めとも、裁きとも、命令とも、幾つもの異なった言葉で表現されていますが、それは、要するに、神の御言葉の言い換えに過ぎないのです。それを弁えた上で、この詩編を読むと、特に、今日の箇所の特徴的に表れているのですが、神の御言葉は、光りではあっても、眺めて喜んだり、感心したりするための、単なる、飾りや、置物ではないのです。それは、飽く迄も、私たちが迷ったり、躓いたり、転んだりしないように、前もって、私たちの足元を照らす光なのです。御言葉と言う光が、幾ら輝いていても、ただ、眺めているばかりで、一步も歩み出そうとしないならば、それは、人通りのない道路を空しく照らす街灯か、点け忘れの裸電球のように、ただ侘（わび）しい光景を、辺りに、作り出すだけのものにしかならないのです。

御言葉は、守って、行ってこそ、輝きを放ち、そのことによって、また、多くの人々を喜びへと招くことになるのです。お互い、肝に銘じたいと思います。

(三輪恭嗣)